



人間牧場主・年輪塾々長
若松 進一

森林資源活用で地域の 未来を伐り拓く

クワガタやカブトムシといった昆虫に夢中になった少年時代の思い出は、大人になった今でも忘れることができない淡く変わり、私たちの暮らしてから自然が遠のき、子どもたちの遊びも巣ごもり傾向となつて、自然の中にいるはずのクワガタやカブトムシは今、ペットショップの網囲いの中となつてしまいました。

そんな自然環境を知らない子どもたちに、クワガタやカブトムシ飼育を通して人間性を培ってもらおうと、四十歳を超えた私の長男息子が夏の暑い朝、早起きしてクヌギの森に仲間とともに分け入り、捕獲したクワガタやカブトムシを雄雌一対ずつ虫かごに入れ、夏休みに松山空港のロビーで子どもたちに無償で配りました。大きな植木鉢にクヌギの苗木

を植えてディスプレイした会場に子どもたちが群がり、二日間で予定していた百五十箱の虫かごは全てなくなるほど大盛況でした。クワガタやカブトムシを自然の森で集めるには夜間早朝ゆえ危険や困難も多いことから、人間牧場に造つていた落ち葉ストッカーを使って、養豚業者さんの協力で幼虫を集め養殖を始めました。成虫確保のめどは立ったものの、今度はコロナ禍で空港ロビーが使えなくなり、配布場所を伊予市内の商業施設「町家」と「道の駅クラフトの里」に移して実施してきましたが、四年目の今年も無償配布を計画して準備をしました。

何年か前、宮城県気仙沼のカキ漁師さんが山に木を植えるという面白いニュースが飛び込んできました。畠山重篤さんが中心になつて起こしたこの運動は、「森は海の恋人」という素敵なフレーズもあつて環境を考える社会運動にまで発展し、東日本大震災という大きな試練に遭遇しながら、その価値はますます高まっています。私も何年か前、松山でのシンポジウムで畠山さんと一緒に登壇し、夕日の魅力について語りましたが、全く違った手法のこの二つがSDGsの十七の目標の一つである「14、海の豊か

さを守ろう」と「15、陸の豊かさを守ろう」という二つをドッキングさせる「クヌギの森」を作る里山・里海活動にしようとして三年前から動き始めました。

今、日本の里山は過疎化と高齢化によつて耕作放棄地がどんどん増え、危機的な状況にあります。里海も同じで海岸線にはたくさんさんのプラスチックゴミが漂着し、白砂清松の松も松くい虫の被害に遭つて見る影もなく、荒れるに任せています。そこで目をつけたのはドングリです。大きなクヌギの木は秋になると沢山のドングリの実をつけます。その落ちたドングリを拾い集め、プランターや畑に直播すれば、翌年には芽が出ます。雑草を取り除く程度の世話で、二〜三年もすれば移植可能な五十cmほどの苗木になります。同時進行で耕作放棄地を開墾します。柔らかい下草が生えるようになるには二〜三年かかりますが、苗木の生育と同時なので、三年目の春には植林ができるのです。クヌギの苗木は成長が早く、年に二回の下刈りをして育てれば、十年後には立派なクヌギの木が林、森をつくり、早ければ伐採まで可能だし、一度植林したクヌギの木は、伐採すると切株から新しい芽が出て再び太りだすという、